

琉球大学学術リポジトリ

琉球の森林の現況と造林について (1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 保表, Oyama, Hohyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20989

琉球の森林の現況と造林について(1)

琉球の自然条件と森林について

森林の造成に当っては、1) 木材の生産、2) 国土の保全と自然環境の改善などの利益を期待するが、その何れの方により大きな効果を期待するかは、その地域の気象的、地理的、地形的条件、産業の種類、その他経済的諸事情、森林の現況などによって違いがある。

琉球は64の小島の構成で、各島の海岸線の総延長は1,000余キロメートルで、従って全陸地の大半が海岸第1線から2キロメートル以内にある海岸地域で、同地域に重要な諸施設や各種産業経営の場所の所在する琉球においては、11月～3月の季節風、4月～12月の台風などと年間暴風期に当るので、潮害や風害の防備のための森林の整備が一段と重要になる。さらに陸地が狭く、地形が単純なため陸地内の自然的貯水条件が悪い上に、通年の高温や暴風も災いして、干害が繰り返えられることも、森林整備の必要度を一層高める要素になる。過去における連年の諸災害、気象的地理的条件、各種産業の近代化のための自然的条件の改善、観光を含めた琉球の総合資源開発の最善を期する見地などから、蔡温行政への理解と、その活用が望ましい。個々の森林のもつ各種の保全機能の優劣は、個々の森林の林木の成長量の多少と、ほぼ一致することが認められている。ところで個々の森林の林木の成長量は、それぞれの森林の集団林木自体によって創造される各森林内の微環境の良否に支配されるものである。なお一般から期待されている森林の各種の保全機能も、森林の整備にともなって改善創造される林内微環境によって誘導される諸現象にはかならないので、林木成長量の優良な整備された森林ほど保全機能も優ることが理解される。

琉球内の森林の現況

あるべき場所に樹がないことや少ないこと、戦災と復興途上の過伐で森林が荒廃していることが一応認められて、全琉緑化推進の住民運動が展開され、さらに不十分ながら造林推進政策が実践されている。

琉球の森林は、極く一部の森林を除けば、その生産量も保全機能もともに低位で、速急に整備を必要とする荒廃森林が広く分布している。本土においては人工林1ヘクタール当りの林分材積が500立方メートル以上の現実林が広く分布しているのに対して、琉球における森林1ヘクタール当りの平均材積は、全琉の全森林において54立方メートル、全琉の公有林と私有林において26立方メートルと12立方メートル、各種経済産業活動の中心地をなす沖縄本島において、官有林52立方メートル、公私有林20立方メートル以下、宮古と八重山地区の公私有林において17～56立方メートルとなっている。ただし戦災と抜き伐りをまぬかれた沖縄本島北部奥地所在の国有林と公有林内の一部の天然生保育林において、用材樹種50立方メートル以上、薪炭用樹種を含めると100立方メートル以上におよぶ林相があり、さらに西表国有林内には、林分総材積200立方メートル以上で、その林分材積内訳はカシ空洞老木材積過半、用材樹種50立方メートル前後、それに薪炭用樹種を含めた材積100立方メートル以上におよぶ一部の森林があり、なお戦災と伐採をまぬかれた貴重用材造林樹種の材積200立方メートル前後を保有する戦前の人工造林地が若干散在している。全森林面積12万ヘクタールの中の造林地面積は約1万ヘクタールで、残る11万ヘクタールの森林の大部分は、上に述べたように、林分総材積も極めて少ないが、用材樹種の材積は、さらに総材積の極く一部に過ぎない生産性と保全機能の極く低位な天然生疎悪林分であって、早急に人工造林又は天然更新によって整備改善を図るべき森林である。

天然生林の造林法の選定について

琉球の森林の中の約11万ヘクタールは天然生疎悪林分で、林相整備の対称の森林である。これらの天然生林は、過去における抜き伐りの程度、更新や保育の有無とそれらの違い、森林火災や自然災害の有無とその程度、などによって個々の林相に可成の違いがある。琉球大学林学科砂川季昭助教授の西表や沖縄本島北部における比較的林相の

良い天然生林の調査結果によると、1ヘクタール当りの、直径4センチメートル以上の立木総本数は2,000～10,000本の範囲において、内用材樹種本数は100～4,000本の範囲で、各林分内の林木の樹令配置も千差万別で、森林内容の質的差の著しい各種森林が散在していることがわかる。さらに無立木草原地、灌木林、極く疎悪な林分などが11万ヘクタール中の大半を占めているので、整備を急ぐべき森林面積は極めて広いことになるが、現在の政府や民間側の造林への投資や活動量の範囲では、年間の人工造林面積は約650ヘクタールであるが、山村住民の最低生活の維持と島産材需用量の供給などの必要もあって、現在の年間の伐採利用面積は約1300ヘクタールになっているので、結局天然生林の伐採跡地の天然更新は、灌木林と無立木草原地への人工造林の面積計だけ人工造林を上廻って現在実行されていることになる。ところで天然生林の更新に当っては対称森林の林相によって、1)人工造林でのみ森林整備が可能となる、有用樹種の稚幼樹を含めた本数が極めて少ない疎悪林分、2)林内に有用樹種の稚幼樹本数が多く、それらを保育することによって森林整備が可能とされる森林、3)林内に壮令有用樹種が多数生育していて、これらを伐採利用した後、伐採木の根株萌芽や発芽稚樹の発生などを促し育てて森林整備が可能となる森林などがある。現在琉球で実行されている根株萌芽による後継林の更新は、更新の対称になる森林内の有用樹種の構成本数が多いほど良い後継林が出来あがるもので、琉球の荒廃した現況にありながら、年間の天然更新面積が過半を占める現情においては、荒廃森林の整備度は極く低率で進行し且つ整備も極めて長年月にわたるので、年間の人工造林面積の大巾な拡大を図ることが望ましい。

人工造林実行の対称となる森林は、1)人工造林の伐採跡地、2)無立木草原地、3)灌木林、4)抜き伐りその他過去における不適正な森林取り扱いのため有用樹種の少ない疎悪林、5)リュウキュウチク叢生する疎悪林、6)老令空洞木で閉鎖された有用稚幼樹種の少ない天然放置疎悪林、7)山麓地帯、谷間沿いその他の凹地形地帯で、あって適潤性広葉樹類が良く繁茂している地力の高

い、スギ、イヌマキその他経済性の高い樹種の生育適地である森林、8)地形が比較的平坦で、栽培法式による各種作業の欠陥がなく、作業も容易で、有利な栽培林業の経営に適する森林などであり、林相条件が同じならば、地力と地形的条件の良い林地を優先し、地利的条件も考慮に入れて造林すべき対称天然生林を決定する。1)、6)、7)、8)などの森林は、一般に造林木の成長が良好で造林投資の効果が高く、従って個人経営の造林においては、これらの森林の造林を優先することが有利である。2)、3)、4)、5)などの森林は、地形的条件によって差はあるが、一般に林地力は森林の荒廃状態に応じて低位であり、これらの森林への造林効果は、前に述べた森林への造林効果に比較して劣るもので、リュウキュウマツを主とするその他の耐乾性有用樹種の造林に限って安全成林を期しうる造林地が多い。2)、3)、4)、5)などの森林への人工造林の目標は現在森林の低生産性と保全機能の低位性の改善増進を図ることにあるので、政府や市町村当局は、それぞれの所有森林に対して、公共性と土地生産性の改善を期するため周致な造林計画をたて、(毎年1)ないし8)のそれぞれの森林に対して造林を行わねばならない。但し農地その他への転用が、国土保全その他の公共の利益を何ら損ずることなく、かつ、転用によって永続的に土地利用の経済的効果の大巾な高揚が期待され、かつ転用の実現を迫られている森林に対する造林は保留して検討する。続く

(大山 保表)